



図解 神話の証明

中西正矢

前書き

地名を記した地図を使い、神話の真実性を証明しています。

先に拙著『古事記は出雲が書いた』を読んで頂いた方がよく判ります。

地名として「高木・高田・高家」などを使うのは、これが天照大神の宰相（実質的に政治を司る）高木命に由来するからです。

岐阜県飛騨市古川町太江の高田神社に「高木命が居た」と伝わっています。

社名の高田は高木命の別名高魂（たかだま）に由来し、地名の太江は旧高家郷ですが、高木・高魂の家に由来します。

ここから飛騨族が天照大神の子や孫を奉じて全国に展開しました。そして、その地に付けた地名が「高木・高田・高家」などでした。紀元前1世紀頃のことです。

飛騨族が九州を侵略した異民族を平定し、その後ヤマトに戻り大和朝廷を開きました（紀元前後）。その200年後に、出雲族が朝廷内の権力を握りました。そして『記紀』を編さんしたのですが、出雲族の祖の大国主命は、九州遠征に協力しなかったために、その子孫達はこれを「天孫降臨」「神武東征」などという神話（フィクション）に変えてしまいました。

大国主命は叔母の天照大神に協力しなかったために出雲国の統治権を召し上げられましたので、これも譲ってやった「国譲り」と呼んでいます。

出雲族は天照大神の仕打ちを憎み、その存在を消そうとしましたが、「高木・高田・高家」の地名だけはそのまま残りました。

出雲族は権力を握るのに、飛騨族が住むこれらの所に出雲神信仰を広めました。そのために「高木・高田・高家」の地名の傍には、「三輪・加茂・須賀・佐田」などの地名が並んで存在します。

これを神話の証明として地図を使い表したのが本書です。

この本は、順不同でページを足していき、最後に地方別の章にまとめたため、ストーリー性がありません。その辺りを汲んで頂きお読み下されれば幸いです。



天照大神の時代（紀元前1世紀）に宰相高木命の一族が、九州遠征（天孫降臨）・ヤマト帰還（神武東征）を主導した。その前後に東日本の要衝にも展開した。

高木・高田（高魂）の地名がすべてそうだとは言えないが、高木一族や飛驒族が守った所にその名を付けたと考える。

それを東日本地図で見れば、主要な街道沿いで古代から栄えた所に分布していることが判る。もし高木・高田が「高い木」「高い田」に由来するものなら、もっと山中に存在しているはずである。

飛驒に無いのは、故郷を偲んで付けた地名だからであり、富山、岐阜に多いのは、飛驒から神通川、飛驒川・長良川を下った出口に位置するからである。



信濃から碓氷峠を越えた関東の入口に、上野国の一の宮貫前神社が鎮座している。

地勢的にも神社周辺の盆地は、東国の関ヶ原と言える地形である。

そこに丹生、高田（高魂＝高木）という飛驒の地名が並んでいるが、高田川の支流が丹生川である。

下流は利根川に合流し鹿島灘に流れる。

その行く手を遮るように仁田（出雲国仁多郡）という出雲の地名、磯部という外宮度会氏の地名が存在する。

仁田は元外宮の佐那神社（三重県多気郡多気町）の鎮座地の地名でもある。

中央に位置するのが名神大社の貫前（ぬきさき）神社であり、祭神は姫大神・経津主（ふつぬし）

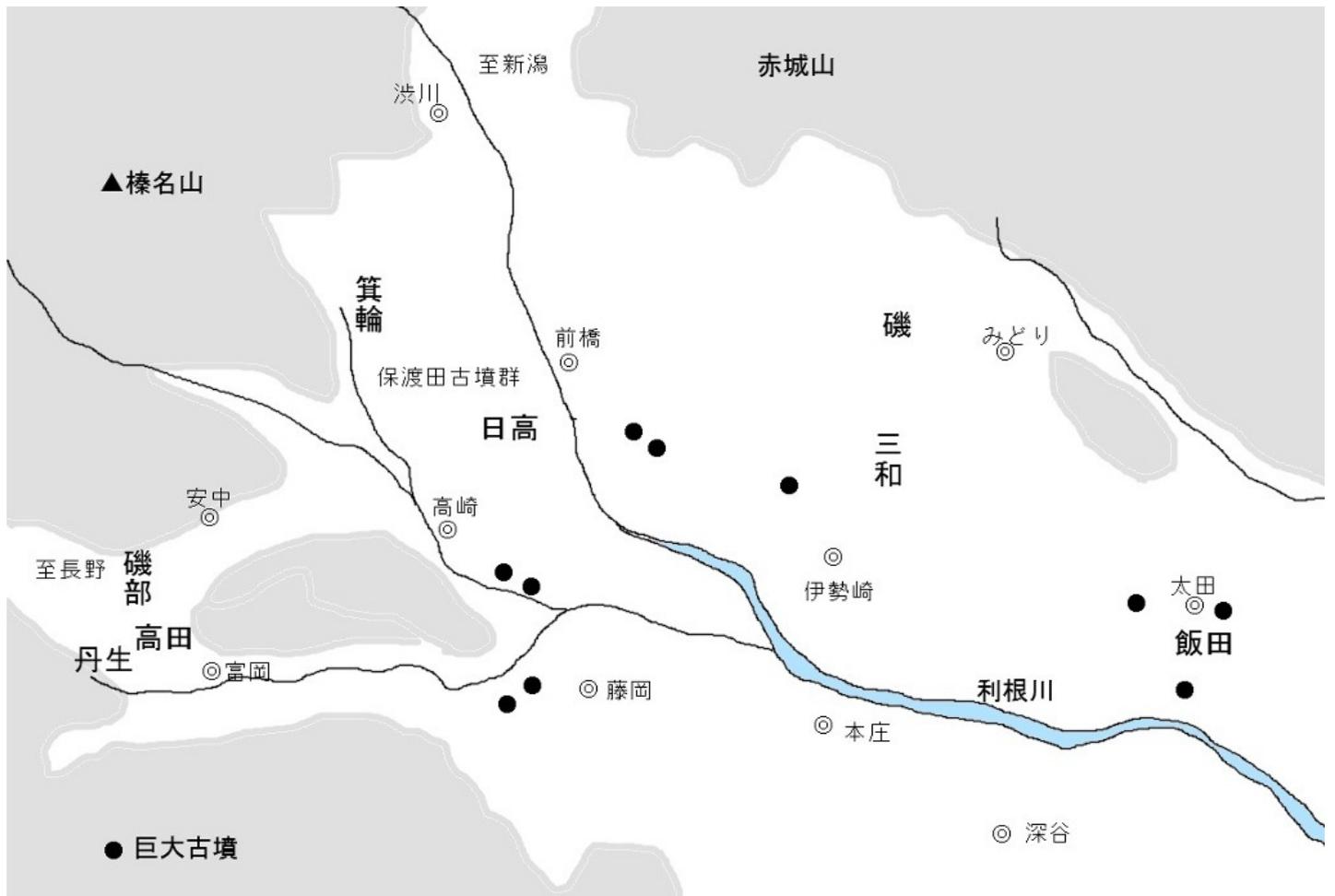
経津主は建御雷（古事記）の別名であり、香取の神である。『出雲風土記』では大国主の子だと記されている。

姫大神は宇佐神宮（豊前一の宮）、春日大社、枚岡神社（河内一の宮）にも祀られているが、いずれも格式の高い名神大社に制定されている。

丹生川⇒高田川⇒利根川の河口の下総一の宮香取神宮も経津主を祀るが、上総一の宮玉前神社（名神大社）は姫神の玉依姫を祀る。

上総・下総（千葉）国は玉依姫・経津主、その利根川上流の上野国は一社に姫大神・経津主を祀っている。

姫大神（貫前・宇佐・春日・枚岡）の正体は、玉依姫（貫前・玉前・賀茂）であると考えられる。



群馬県には古墳が1万基以上造られたと言われている。

その中でも120m以上のものを地図上に●で記した。

飯田・日高・丹生・高田の飛驒と、箕輪（三ノ輪）・三和・磯部の出雲の地名との位置関係が興味深い。

富山湾岸を守った高木一族

異民族の襲来に備えて高木一族が飛騨から富山湾岸に移住



天照大神の宰相であった高木命は、高田神社（岐阜県飛騨市古川町太江）の地に居たと伝わっている。太江（旧高家郷）は富山湾に上陸した異民族が神通川をさかのぼってやって来る、飛騨への侵入口にあたる。

高木一族の地名（高木・高田・高家・高宮）が、富山市・射水市・小矢部市・南砺市などにある。いずれも交通の要衝地である。

福井市の高木も北陸街道の九頭竜川の渡し場に位置する。

この地図の東方の新潟県上越市にも高田の地名があるが、ここは新潟と長野へ行く街道の分岐点である。

能登半島の高家は気多大社（羽咋市）の地であり、社伝にはここから七尾市（高田）へ、大国主が平定したと伝わる。

高木・高田などの地名はどこにでも在りそうに思えるが、存在している場所は限られている。しかも、そのどれもが役所の近く、渡し場・船着き場、つまり古代から栄えた場所にしかない。



諏訪湖は天竜川の水源地。

ここを抑えてしまえば、飛騨と東国の連絡を遮断できる。

地図を見れば、諏訪大社の鎮座地は、平地がもっとも狭くなった所である。

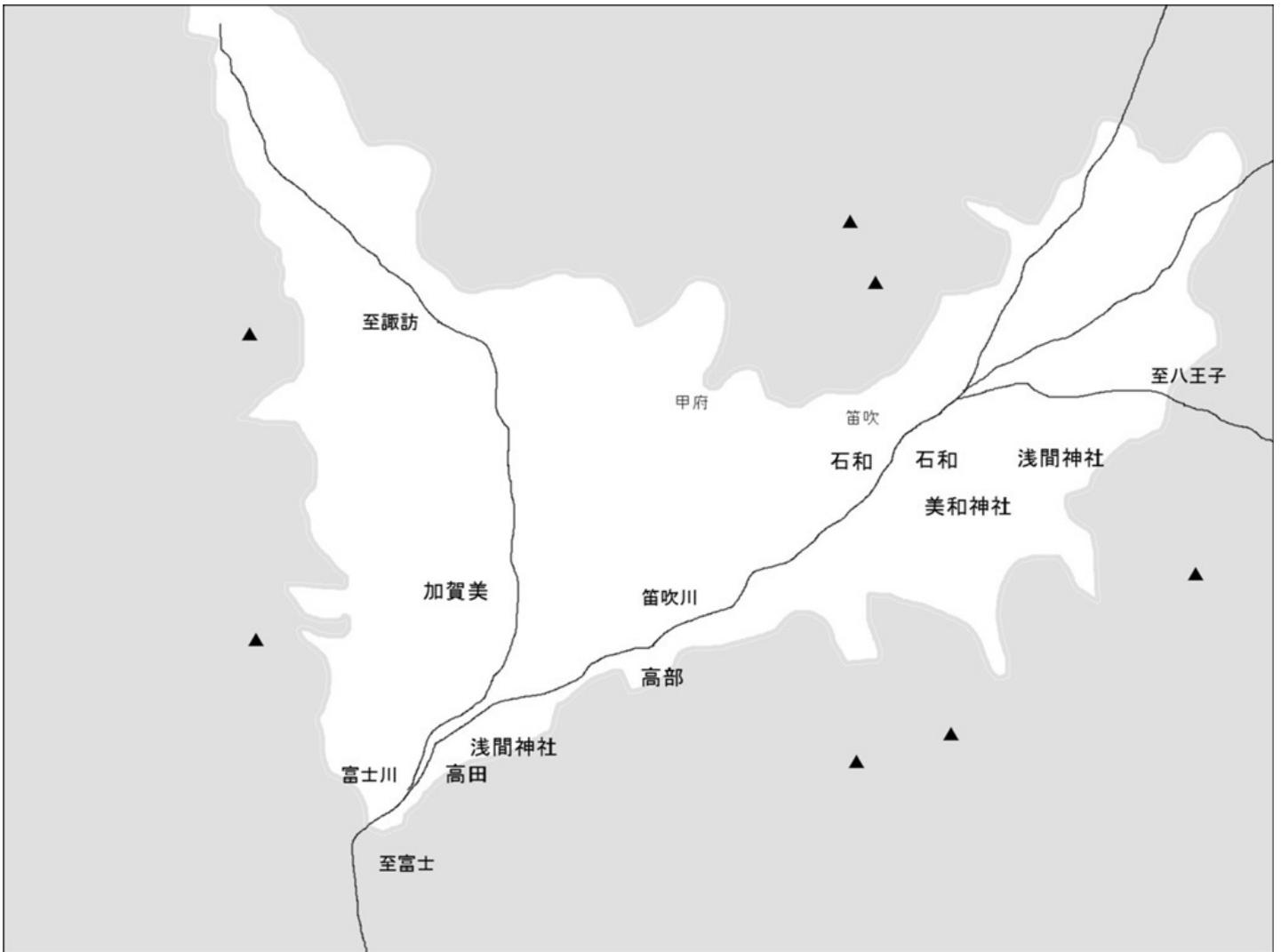
何もこんな狭いところに作らなくても、東の茅野か西の塩尻に広い土地がある。

この地を選んだ理由は、ここさえ抑えてしまえば、交通を遮断できるからであった。

それで諏訪湖の北と南を見張るために上社と下社が立てられた。

天竜川は箕輪（三輪）を通り、飯田（い・ひだ）と喬木（たかぎ）に到る。

そして、その河口にはやはり飯田（浜松市）と高木（磐田市）が存在する。



甲斐国は諏訪（長野）・富士（静岡）・八王子（埼玉）を結ぶ交通の要衝地。

武田信玄も甲府に館を設け、東の北条、北の上杉、南の今川と手を結んだり、戦ったりした。

一の宮は浅間神社、二の宮は美和神社

浅間神社の候補社は、西八代都市川三郷町高田と笛吹市一宮町一ノ宮の二社がある。

西八代郡のは高田の地にあり、熊本県八代市は肥後高田である。

笛吹市のは石和の隣に位置するが、石和（いそわ）は外宮度会氏の旧姓磯部氏の磯和に通じる。

志摩市磯部町の伊雑宮は「いさわ宮」とも呼ばれる。

浅間神社祭神はニギ尊の妻の木花咲夜姫（ホホデミの母）であるが、『播磨風土記』では大国主命の妻とされている。

駿河国一の宮も浅間神社であり、社家の和邇氏を『日本書紀』は5代天皇の皇族としているが（古事記にはない）、三輪氏系図、旧事紀などでは三輪氏の同族（宗像氏と始祖を同じくする）であると書かれている。

中央市高部の「高部」は高家とも書くことができる。千葉県南房総市の高家神社は「たかべ神社」と読む。



上越高田は北国街道と、長野ー軽井沢ー群馬へ行く街道との交差点。

ここにも飛田・飯田・高田の飛騨の地名と、小出雲などの出雲の地名が混在している。

流れる川もそれに相応しい名の関川という。

源流は戸隠神社の戸隠山（長野市）であるが、長野市の中心部にも高田と三輪の地名が隣接する

。

妙高市飛田は、口碑では天照大神の四男の活津日子根命が異民族の上陸に備え守った所。

後に出雲が征服し、斐太（ひだ）神社に出雲神大国主を祀った。

小出雲は高田と日本海を見渡せることができる小高い地。里謡に「越後見納め小出雲坂よ」と歌われている。

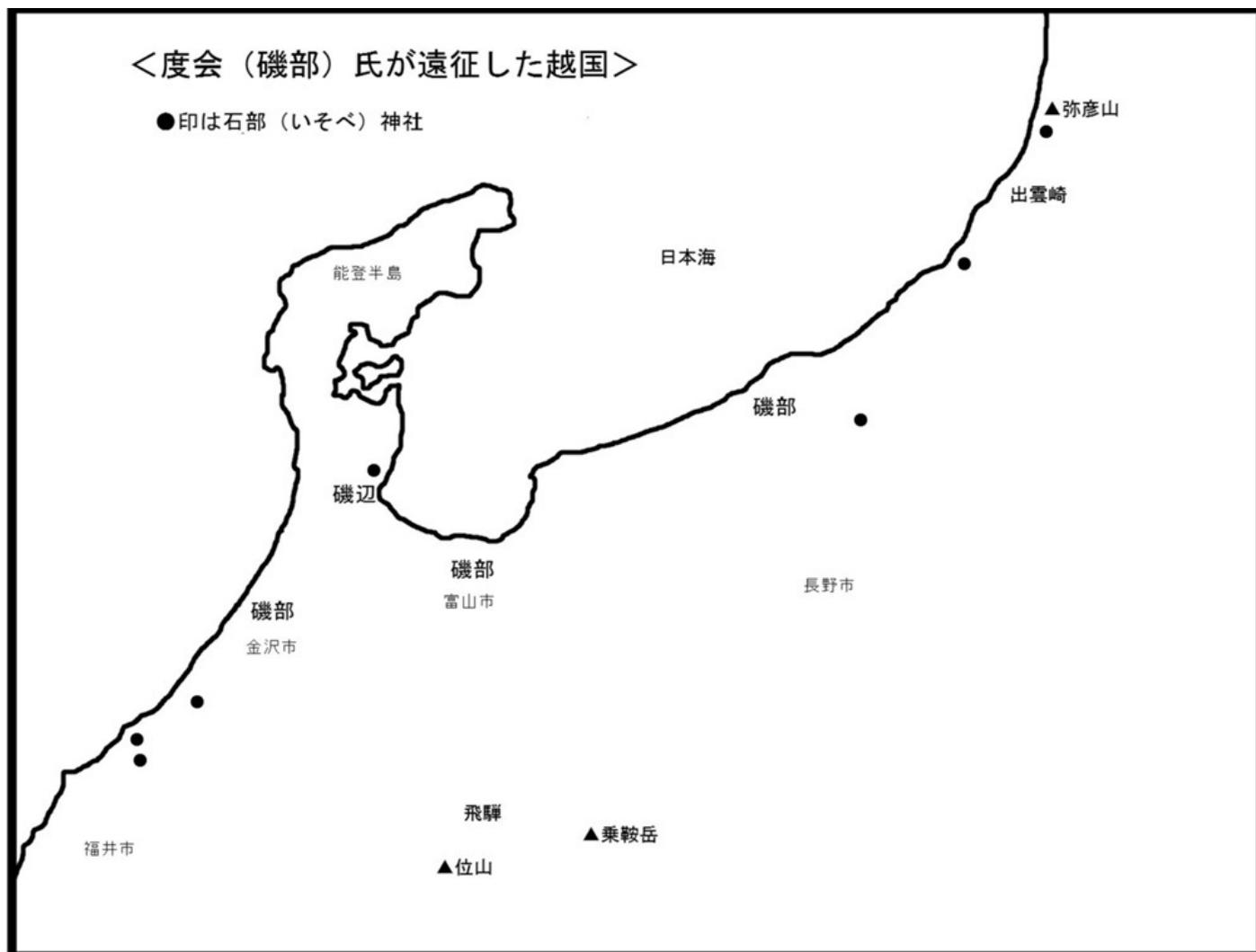


越後一の宮は弥彦神社（名神大社）

祭神の天香山（あめの・かぐ・やま）命は火明命の子（火明命は大国主命の子「播磨風土記」）片目の神とも言われている。片目の神と言えば天目一箇命（大国主命の子・多度大社）、またの名を天日影（御上神社）・金山彦（南宮大社）の祭神。

「香（かぐ）」は出雲神佐太大神（鹿島町）が生まれた「加賀（松江）」から転訛した。加賀国の菊理（くく・り）姫（白山比咩神社）の「くく」の語源でもある。富山県射水市の港は久々湊（高木・鳥取の隣）。鳥取氏は三輪氏。能登二の宮天日陰比咩神社（鹿島郡）祭神の久久能智（くく・の・ち）命は木神。社家の船木氏は三輪氏。

木神と言えば新羅から木種を持ってきたイソタケル。弥彦（やひこ）も大屋彦（イソタケルの別名）。対岸佐渡の一の宮度津神社祭神もイソタケル。



外宮に伝わる『豊受太神宮禰宜補任次第』という書物に、神官の度会氏が11代天皇の命を受け、越国に遠征したと記されている。

その者の名は大若子（おおわくご）と言ひ、天皇に遠征の功績を認められ、大幡主の名を授かっている。

大幡主は大幡神社（佐渡市）と御馬神社（金沢市）に祀られ、式内社に認定されている。

（大若子の名では梅宮大社（京都）、大幡主の名では櫛田神社（福岡）にも祀られている。）

度会氏の旧姓は磯部氏

その足跡が磯部の地名として、糸魚川市・富山市・金沢市・氷見市・鯖江市（福井市の南）に残っている。

この地方には石部（いそべ）神社が8社（うち7社が式内社）もあり、出雲神を祀っている。

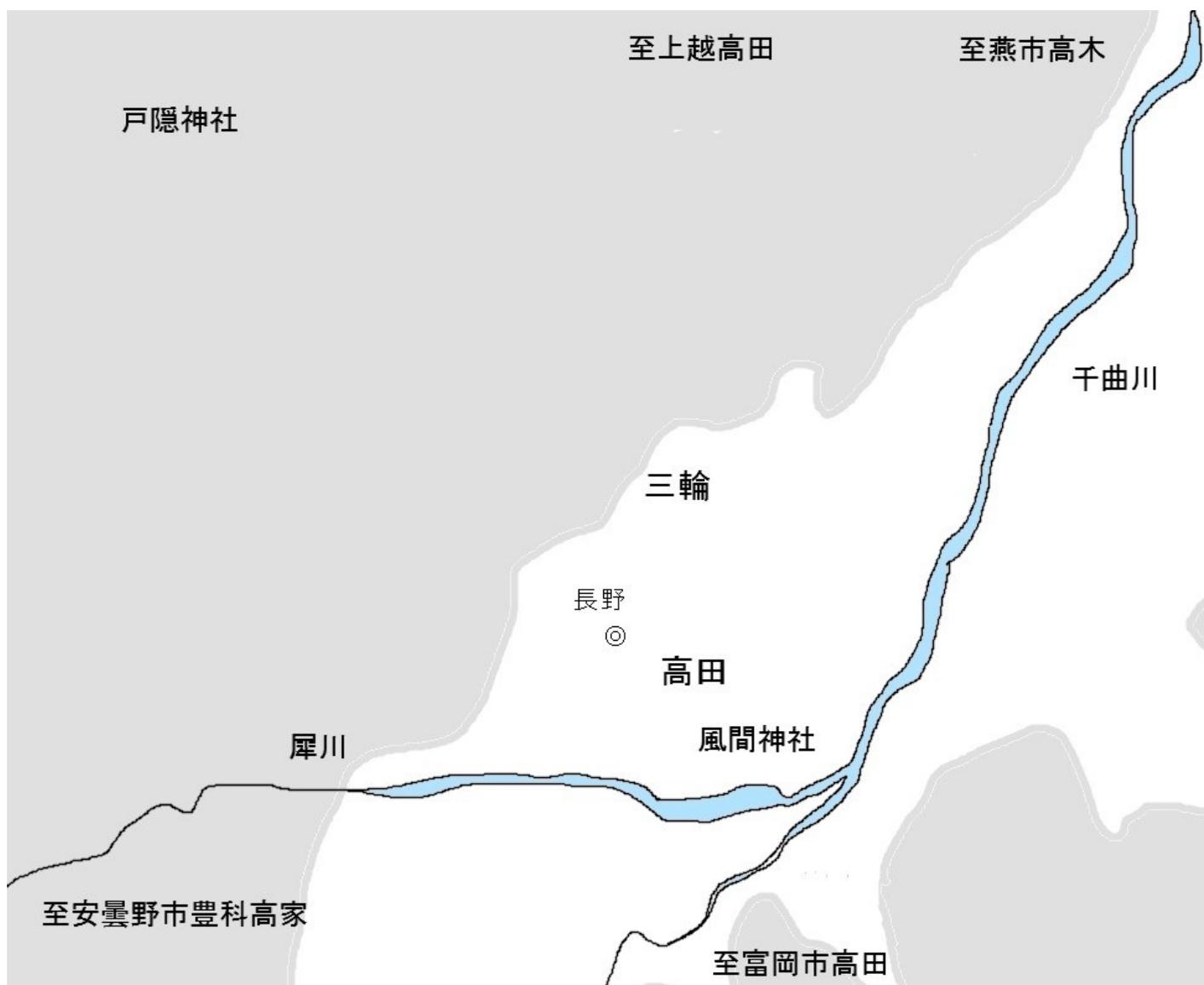
この神社は越の他は、外宮の故郷丹波と近江にしか存在しない。

例外的に播磨に1社あるが、播磨の伊和大神の伊和都日売は、外宮の豊受神だと伝わっている。

石部神社は度会氏が造ったと考えられる。

以上のことから、外宮の度会氏が越に遠征したというのは、史実であったと考えられる。

（福井県鯖江市磯部の磯部の地名と磯部神社は、地図に書ききれなかった。）



長野市は日本海側と関東・濃尾地方を結ぶ要衝のひとつ。

その市役所のすぐ東が高田（飛騨）、北には三輪（三輪）の地名がある。

高田の南の風間神社は、伊勢国からやって来た伊勢津彦を祀る。その伊勢津彦は『播磨風土記』に大国主命の子と記されている。

千曲川から分かれた犀川は松本市へと流れている。

犀川という川名は石川県金沢市にもある。三輪山（金沢市菊水町）に源を発し、出雲町（金沢市）へと流れている出雲に関係のある名である。



榊田川（旧磯部河）以東を神郡と言ひ、長官は外宮の神官度会（磯部）氏が務めていた。地図の上（北）に「出雲」を逆にした雲出（くもず）川が流れ、出雲の地名である「須賀」がある。（現在の近鉄伊勢中川駅周辺）

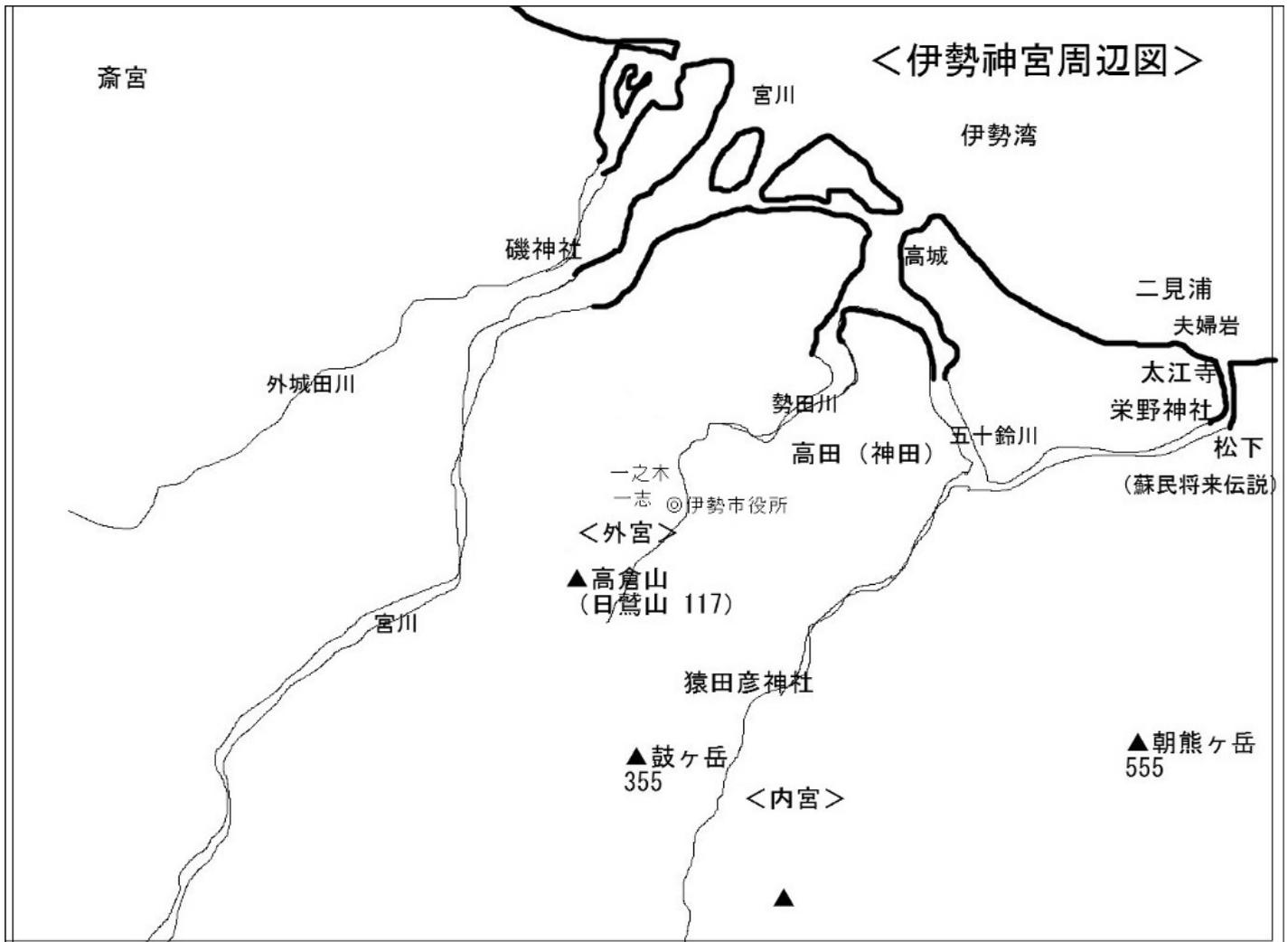
ここには出雲の四隅突出墳（八幡古墳）の他、前方後方墳が四基存在している。さらに、飛鳥時代の廃寺が幾つかあり、日本最古の文字が書かれた土器が出土している。

律令時代の伊勢国の中心は鈴鹿市であるが、それ以前は須賀周辺にその中心があったと思われる

。

松阪市の堀坂山・飯南、その南部（多気町）の仁田、佐田も出雲の地名である。

高木・高城・高田・高宮・飯高・疋田は飛騨に関連する地名



伊勢市の地は狭い範囲に数本の川が流れている。特に宮川と勢田川は氾濫を繰り返してきた。少しまとまった雨が降れば内宮には近づけなかったに違いない。その内宮は東西南を山に囲まれた日当たりの悪い場所にある。およそ日神を祀るにこれほど相応しく無い場所もないであろう。

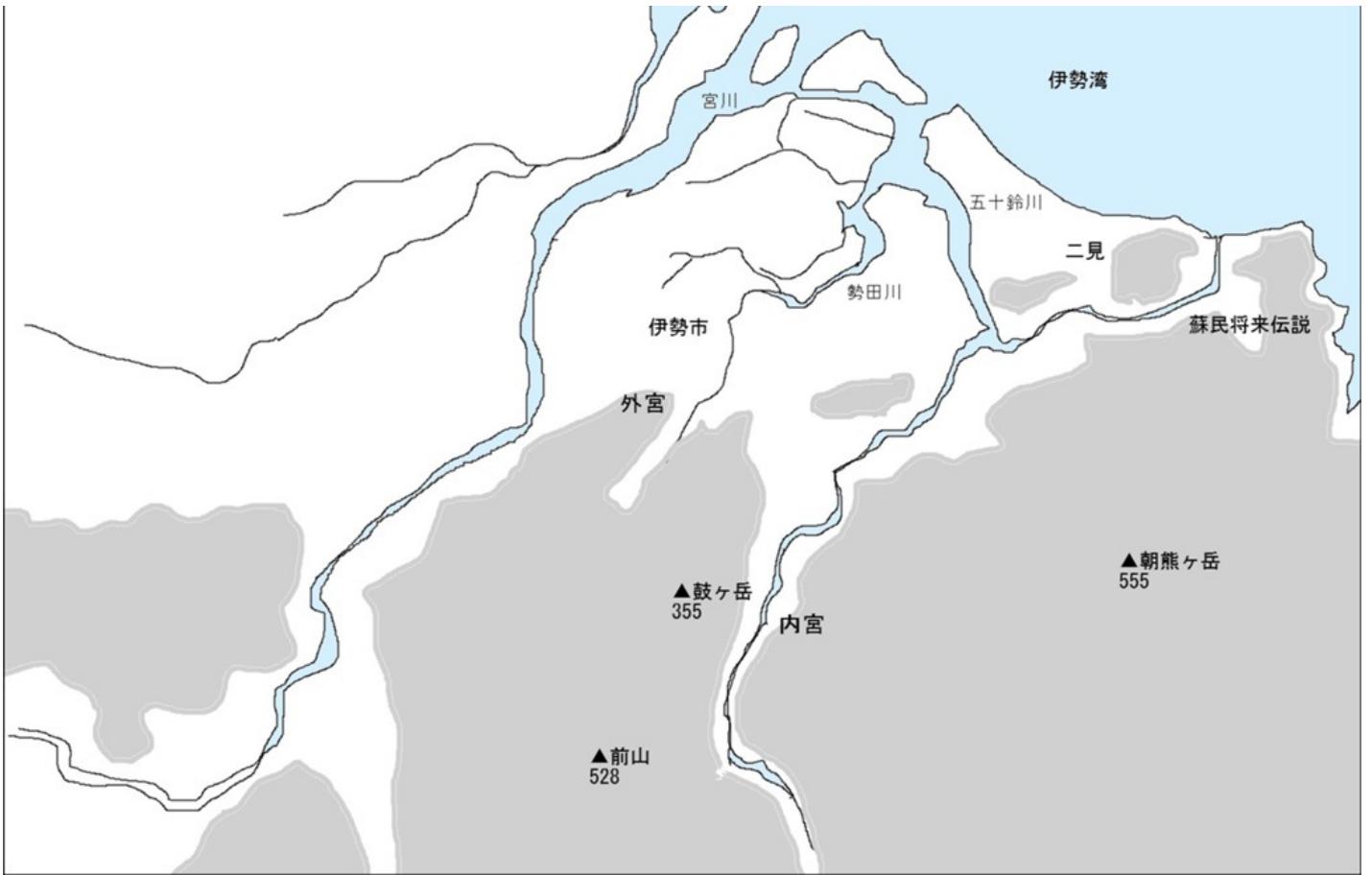
内宮に行くには外宮の前を通るか、あるいは五十鈴川を上るしかない。現在は高城（二見町）に流れているのが本流であるが、江戸時代の大地震以前は、松下に流れる方が本流であった。この松下には『蘇民将来伝説』が伝わっている。それは「出雲神スサノオが宿を求めたところ、蘇民将来という者以外は断った。怒ったスサノオは蘇民将来以外の村人を皆殺しにした。」というものである。

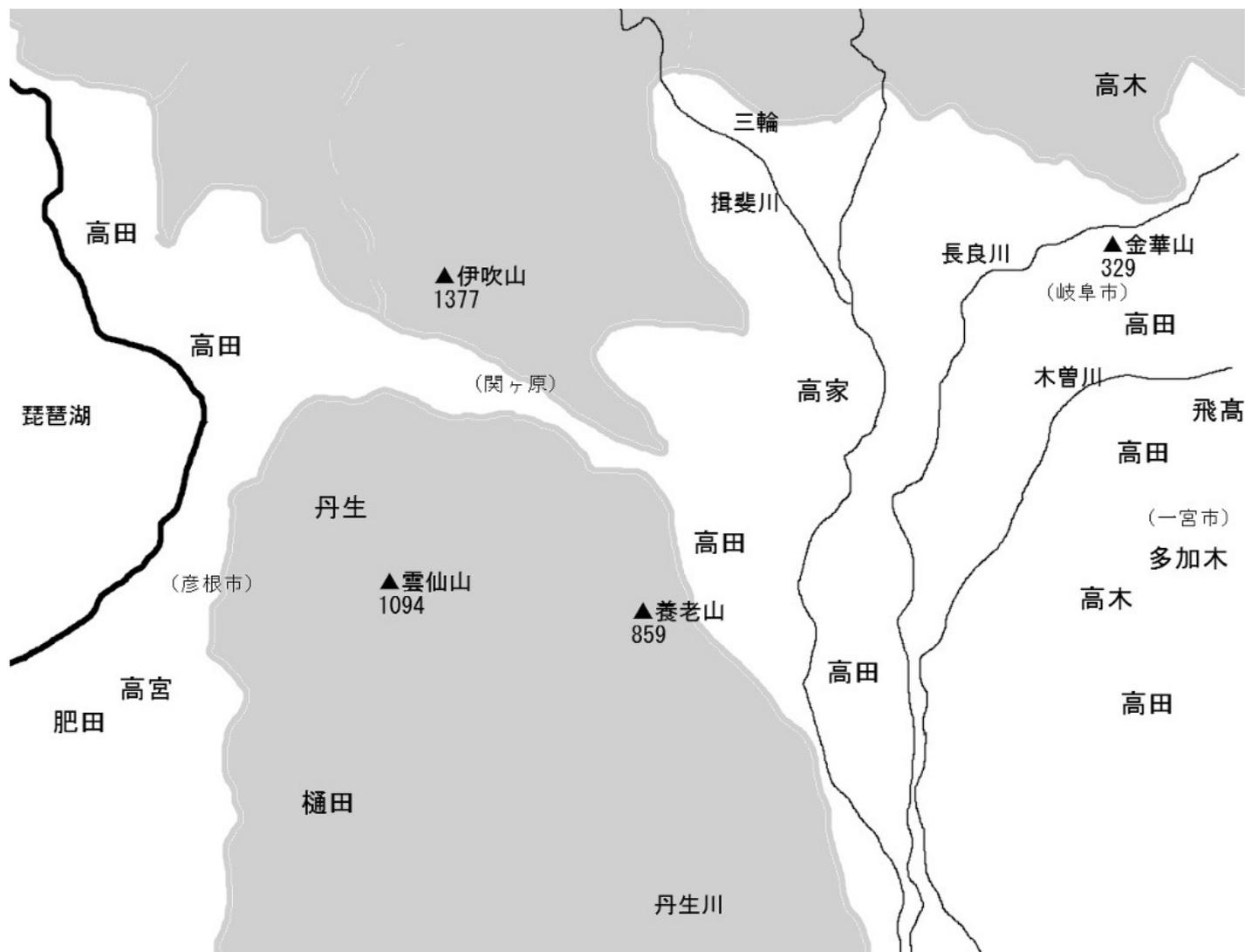
現在でも伊勢市周辺の民家は、軒先に『蘇民将来子孫家』という注連飾りを一年中飾っている。外宮の祭神はスサノオの子であるので、伊勢の住民は「内宮（天照大神）ではなく、外宮（出雲神）を祀ります」という標を掲げている。

五十鈴川河口の高城神社（高城）と栄野神社は、外宮の度会氏の祖を祀っている。内宮の手前の猿田彦神社の社家も度会氏（宇治土公氏）である。地図には載っていないが、内宮の南東は志摩市磯部町であり、度会氏の旧姓も磯部氏であった。

つまり、内宮は外宮（出雲）の勢力に包囲されている。





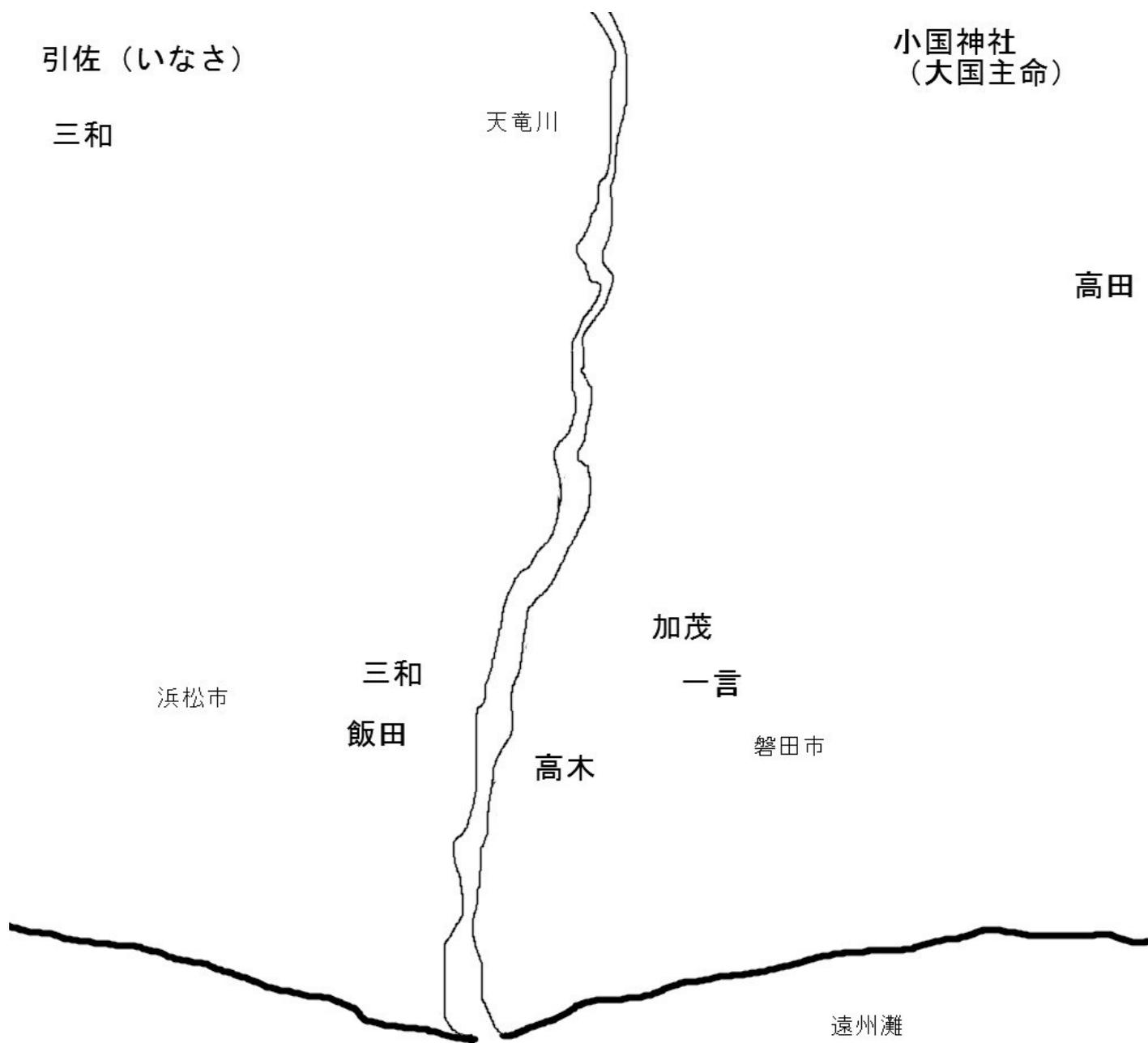


関ヶ原は飛驒とヤマト、そして遠くは九州と結ぶ交通の要衝地である。
そこで古くからこの地に飛驒（天孫）族が移住し、ヒダ・丹生の地名をつけていた。

天照大神の時代（紀元前1世紀頃）には、宰相の高木命の一族が展開し、九州遠征（天孫降臨）
のための中継地を作り、高木・高田・高家・高宮などの地名をつけた。

その頃は、伊勢湾が岐阜市まで深く入り込んでいた。
一宮市周辺だけは島になっていた。そのためここは中島郡と呼ばれた。

岐阜は岐（分かれ）の阜（岡）という意味で、神話に書かれている天のヤチマタのことである。
三重県鈴鹿市に居た猿田彦命は、船団を組んで岐阜までニニギ尊を出迎えた。



天竜川の渡河地も東国への要衝である。

その渡河地点右岸に飯田、そして左岸に高木の地名が見られる。飯田は「い・ヒダ」であり、飛驒のことである。

山手の引佐は大量の銅鐸が出土した所である。

銅鐸は飛驒（天孫）族の祭器であったが、後に出雲族に取り上げられ破棄された。

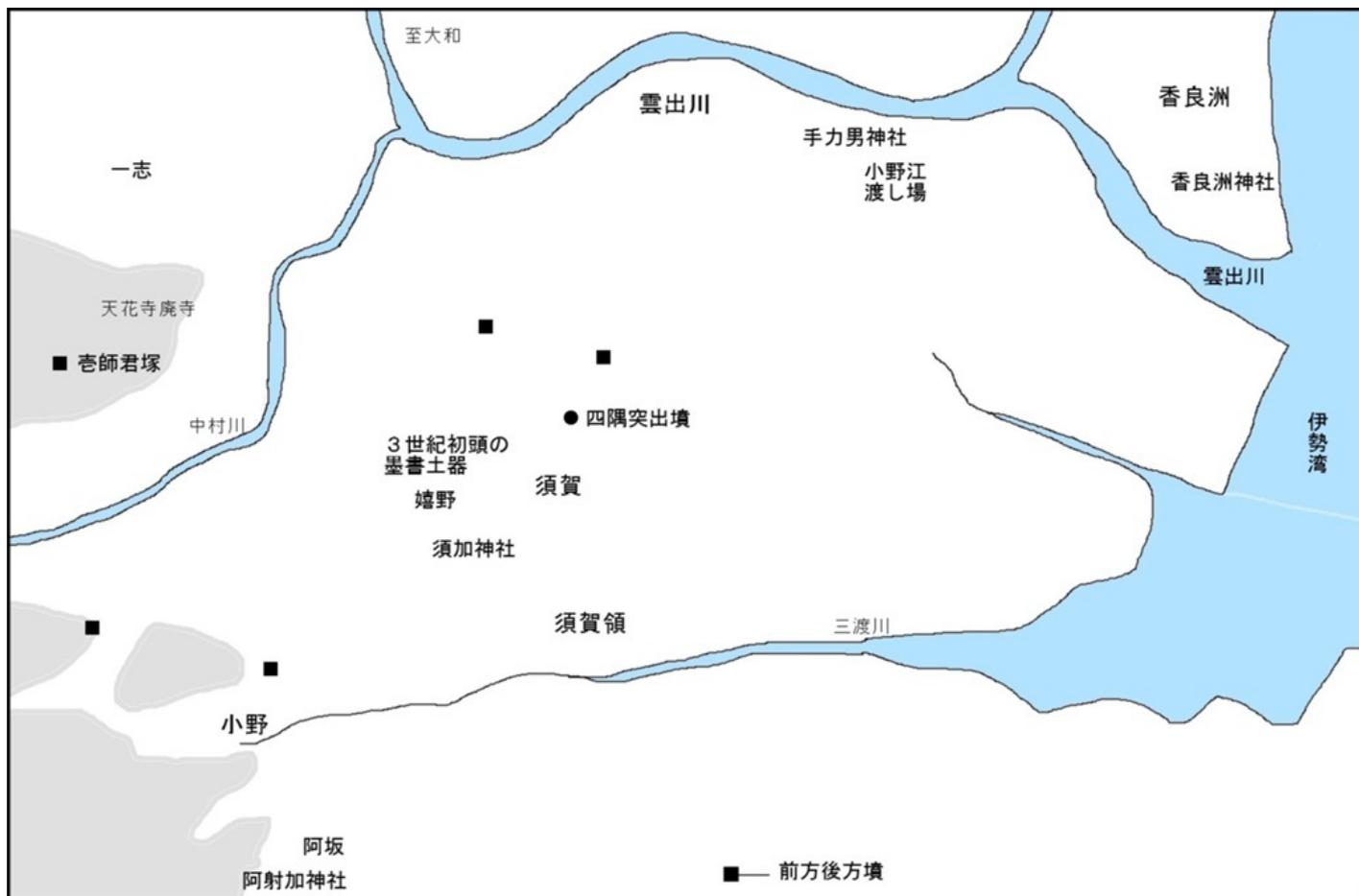
引佐（いなさ）とは出雲大社の稲佐の浜に由来し、「い（な）さ」＝いさ（いそ）である。語尾に「わ」が付けば、三重県志摩市磯部町の「伊雑（いざわ）宮」になる。

イソタケルのイソ（磯・石）が語源である。



なぜこんな離れた所に齋宮を設けたのか。内宮からの距離は1.4kmもある。
間に大小幾つも川が流れているので、少しまとまった雨が降れば、とても近づくことはできない

。多気町役場の近くに足田（飛驒）からは銅鐸が発掘されている。
明和町・玉城町役場の近くには佐田という地名がある。（多気町の仁田も出雲の地名）
齋宮の北の行部には、出雲氏族の伊福部氏が居たと伝わる。（三代実録）
内宮の風日祈宮と外宮の風宮に風神を祀ったのは、この伊福部氏と思われる。
伊勢国の枕詞は「神風の」である。
榑田川の高宮は元伊勢と言われている。
下流の榑田神社は博多に勧請され、祇園山笠の榑田神社として有名である。祭神は外宮の度会氏の祖。
度会氏は旧姓を磯部氏と言った。榑田川も磯部河と呼ばれていた。
射和（いざわ）は志摩市磯部町の伊雑（いざわ）宮と同名である。



古代の情報が集約されている地。この地図だけで一冊の本が書ける。

旧一志郡嬉野町（現松阪市）の中心地の地名は須賀（嬉野須賀町）。

ここに出雲の四隅突出墳が存在する。

そして、その北を流れるのが「出雲」を逆さまにした雲出川。

河口は香良洲町（津市）。香良洲神社は生田神社（神戸）から勧請され、祭神は若ヒルメ（天照大神の妹とされる）だが、香良＝韓（カラ）より韓神の出雲神イソタケル。

佐賀県の嬉野の北にイソタケルが上陸したという話が伝わっている。

支流の中村川流域に菅師君塚。菅師君は5代孝昭天皇から分かれた皇族と言われ和邇氏の同族。

和邇氏の本拠地地理市に前方後方墳が多いが、この地にも5基ある。

小野氏も和邇氏の同族。そして和邇氏は出雲氏族宗像氏・三輪氏の同族。

外宮の勢田川の渡し場も尾上（伊勢市）、外宮の前も一志町。

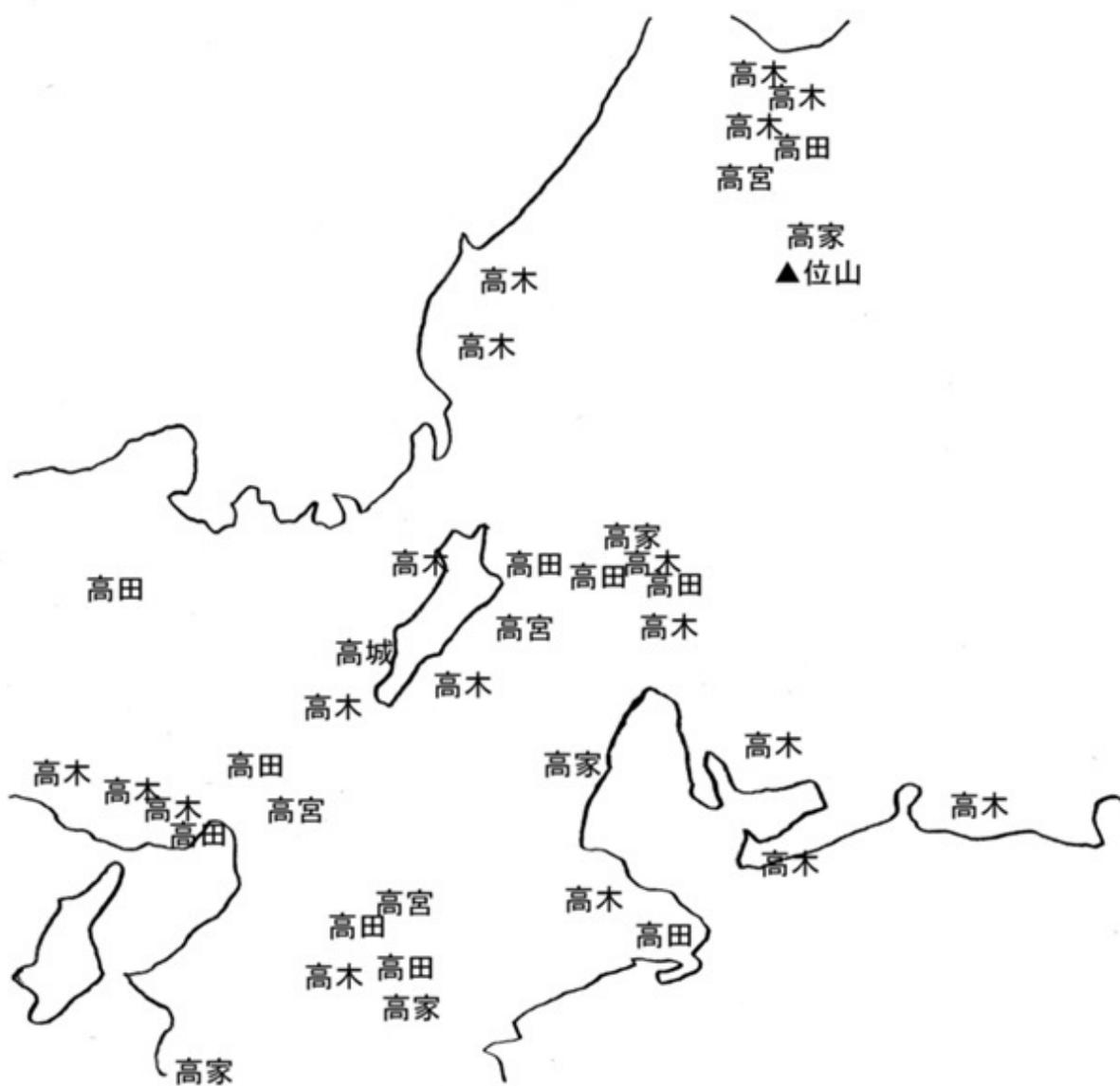
須加神社祭神は宗像氏が祀る三姫。

飛騨位山から展開した天孫族

紀元前3～1世紀頃、飛騨の中心は位山のふもと宮村（高山市一之宮町）にあった。

位山は日本海に流れる神通川と、太平洋に流れる飛騨川の分水嶺になる。

ここから飛騨族（天孫族）が九州遠征（天孫降臨）に出発した。



ご覧の通り、高木・高田などの地名は西に偏っている。そして、そのどれもが交通の要衝地に存在している。

北の富山市に集中していることは前述した。

同じく南の岐阜市から一宮市にかけても多くある。ここは飛騨街道の入口にあたる。

他には、琵琶湖周辺とヤマト、それに兵庫県南部（尼崎市・西宮市・三木市・姫路市）にある。どれもがその地方の中心地に位置している。

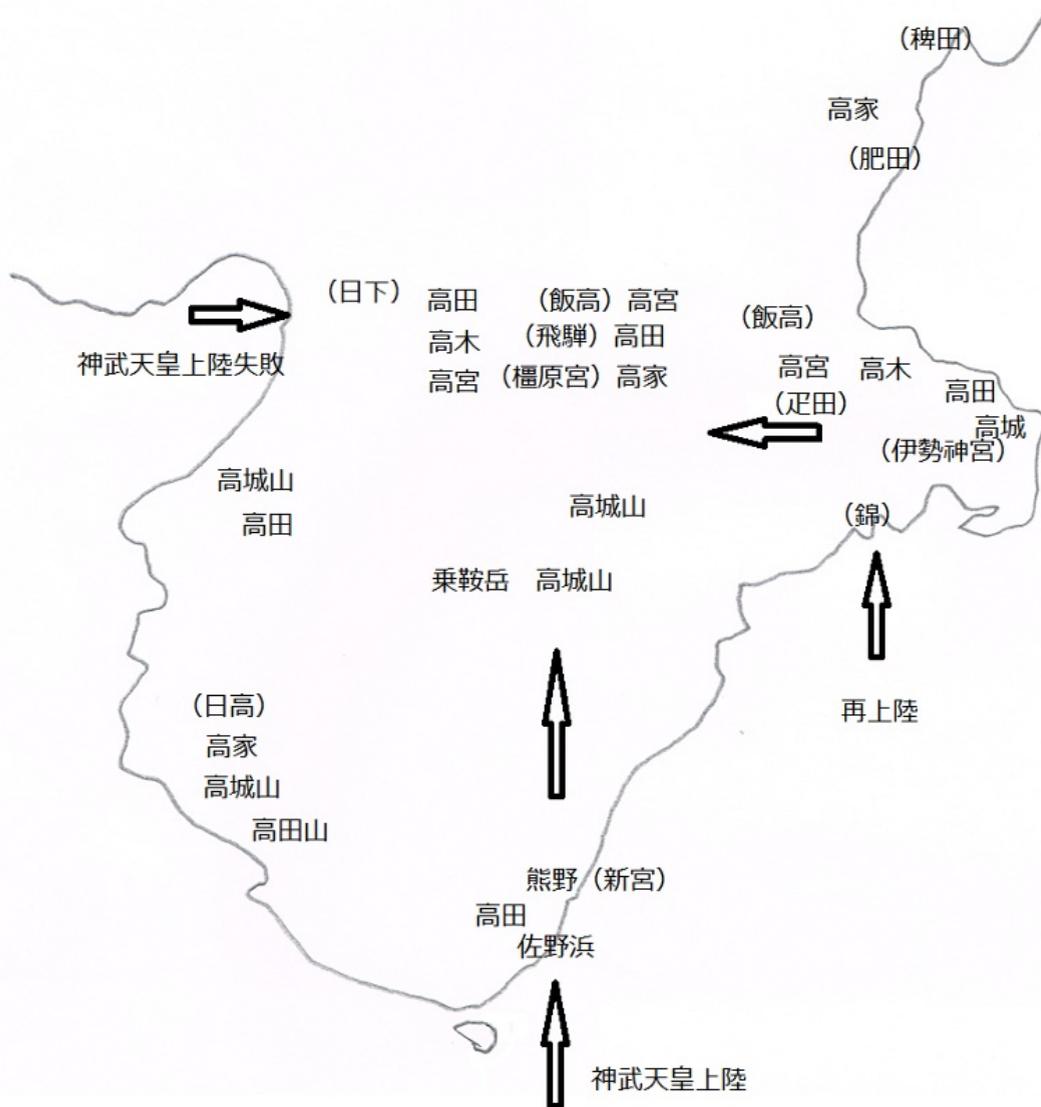


神武天皇が上陸地に選んだ熊野村は、現在の和歌山県新宮市。
ここは天孫（飛驒）族が居た所。高魂（たかだま）命＝高木命の名に因んだ高田の地名がある。
佐野浜は神武天皇の幼名サヌから名付けられた。
そして、後に出雲族が支配し、三輪崎の地名を付けた。

地名の「高田」と「三輪」の関係は、奈良県桜井市三輪、福岡県旧朝倉郡三輪町などにも見られる。

神武天皇が熊野へ迂回した理由

神武天皇のヤマト入り失敗から熊野迂回



神武天皇は日下（東大阪市）に上陸しようとしたが、ヤマトの留守部隊と戦闘になってしまった。

その数十年前、天照大神は孫ニギ尊を九州遠征（天孫降臨）に派遣したと同時に、尊の兄ニギハヤヒをヤマトに遣って、その帰りを待たせた。（紀元前1世紀）

しかし、九州に上陸した異民族の征討に予想以上の年月を要してしまった。

ニギ尊の代わりに孫の神武が帰ってきたのであったが、ヤマトでも既にニギハヤヒが亡くなっていたので、戦闘が起きてしまったのであった。

日下の戦いに敗れた神武は「日神の御子が、日に向かって戦うことは良くない。」と言って海路を南下した（古事記）。しかし、東征自体が日に向かって進むことなので、この言葉は後世の創作であることがわかる。

戦いに敗れば、常識として考えるのは、もと来た場所に戻り体制を立て直すか、あるいは手前か先に上陸し、敵の側面か背後を突こうとするはずである。

神武はそのどの策も採らずに紀伊半島を迂回し熊野に達した。

その目的は、伊勢湾岸の飛驒（高天原）の勢力に加勢を頼むためであった。

上陸した佐野浜の名は、神武の幼名サヌ命に由来する。

熊野の北東の錦浜に再上陸したのは、援軍を集めるための別働隊であった。

「飯高」は「ひだ（飛驒）・か」とも読める。ここで軍勢を整えてヤマト入りを果たした。

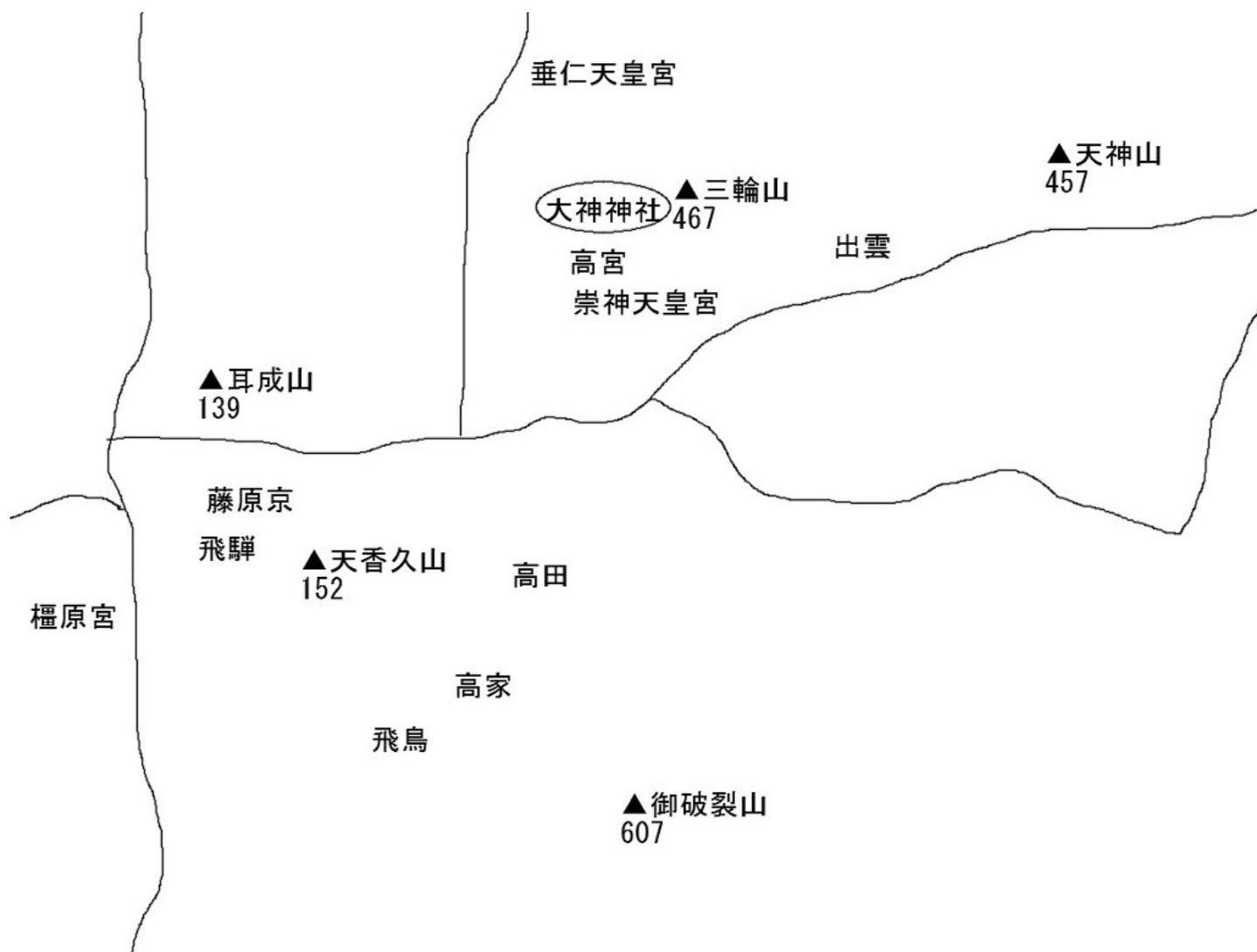
この地方には各地に神武天皇通過の伝説が伝わっている。

神武天皇の本隊は十津川をさかのぼり、乗鞍岳（五條市）―天川―吉野（高城山）と進んで別働隊と合流した。

そして、橿原宮を建て、その周囲を高木一族が護ったのであった。

「鈴島大和の国」と詠まれたように、古代ヤマトの中心は、カモメが飛び交うほどに入り江が入り込んでいた。遺跡も山裾に集中している。

それでニギハヤヒ命の拠点、ヤマトの中央ではなく宇陀にあったのだと考えられる。



大国主命を祀る大和一の宮大神神社は高宮の地にある。
その南には高田・高家と高木一族の地名が並んでいる。



下鴨神社が鎮座する地は高木という地名。後に出雲郷と名付けられた。
賀茂大神は八瀬の御蔭神社の地に降りた言われ、葵祭はここから始められる。
御蔭神社を通る街道は三千院を経て、若狭に繋がっている（鯖街道）

祭神の玉依姫が川で拾った矢を持ち帰ったところ、妊娠して別雷神（上賀茂）を生んだと伝えるが、松尾大社も「秦氏の女子が川で拾った矢を持ち帰ったところ妊娠し男子を産んだ」と伝え、「秦氏は祭祀を賀茂氏に譲った」としている。

そして、松尾神は宗像神だと言う。
宗像氏は出雲氏族の三輪氏と賀茂氏の同族である。

また外宮の故郷丹後一の宮籠神社の極秘伝には、祭神火明命は別雷神（上賀茂）と異名同神だとある。
火明命は別名ホホデミ命（若狭彦）と言われ（日本書紀）、出雲神大国主命の子であると『播磨風土記』に書かれている。（播磨風土記には、播磨に伊勢津彦が居たと記している）

八坂神社には、内宮の五十鈴川河口に伝わった『蘇民将来伝説』のスサノオ神と蘇民将来が祀られている。
北野天満宮の境内摂社には、外宮の度会氏の祖が祀られている。
そして、松尾大社の秦氏は伏見稻荷社にウカノミタマを祀っているが、外宮の豊受神のことである。

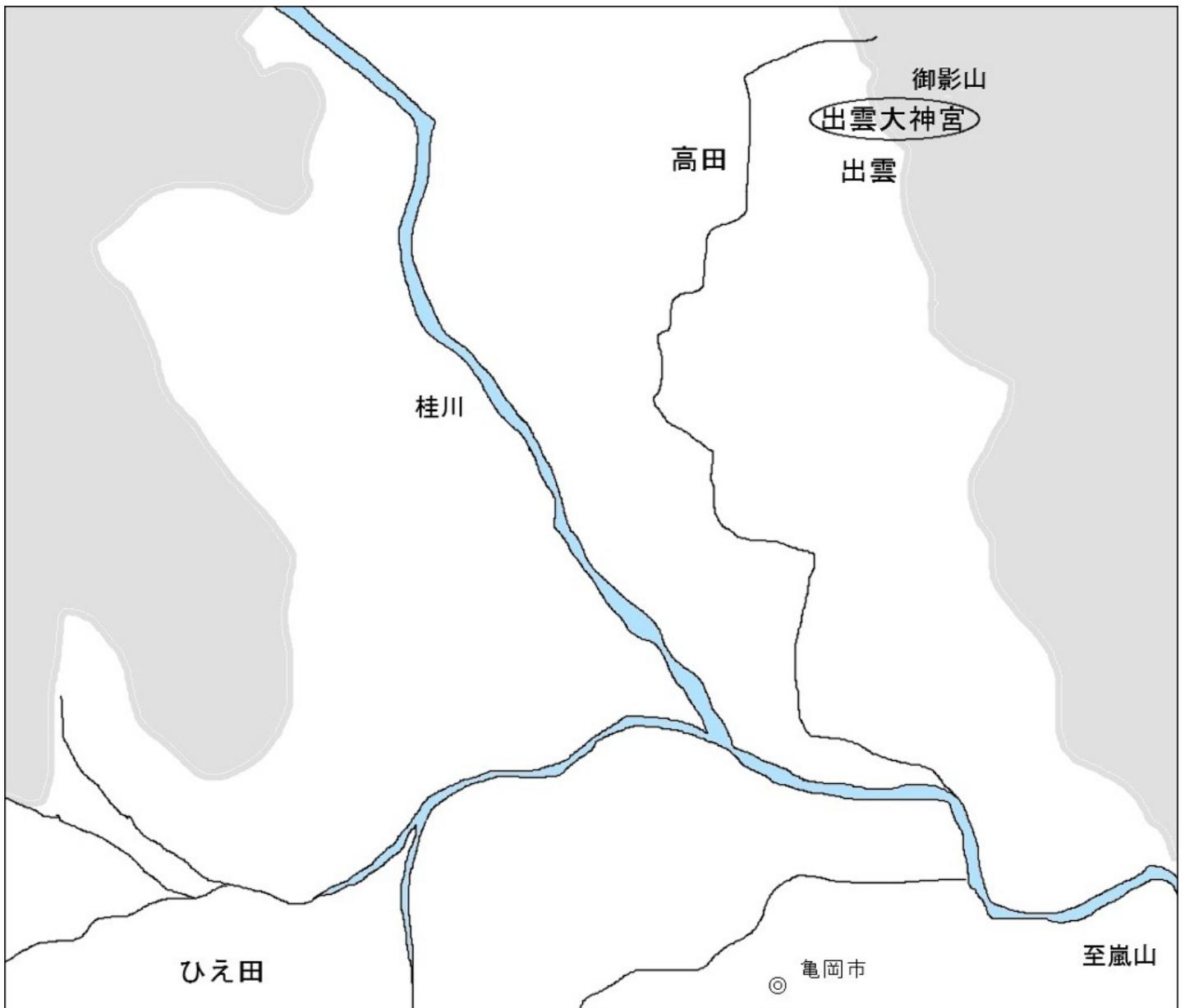


三上山近くから銅鐸24個が出土した。飛騨(天孫)族の先祖を祀るための祭器であったが、出雲族に取り上げられ土中に廃棄された。出雲の加茂岩倉遺跡の銅鐸も、出雲に回収されて捨てられたものである。

日野川上流には日田、高木神社、下流にも高木、高木神社がある。

御上神社の祭神は天之御影命。天照大神の孫を装っているが、御蔭神社(八瀬)の賀茂神。別名を金山彦(南宮大社)・天目一箇(多度大社)というイソタケル。

野洲川・日野川河口は琵琶湖がくびれている所。対岸は大津市和邇高城



丹波一の宮出雲大神宮（京都府亀岡市）の手前にも高田の地名がある。

元出雲と称され、出雲大社よりも歴史が古いと言われている。

神体山の御影山の名前から、賀茂大社・御上神社（野洲市）との関係が考えられる。

708年、丹波国司に三輪伯麻呂が着任している。



淀川は古代の重要な交通路であるので、高木一族の高木・高田・高宮の地名が並んで在る。

上流の要衝にあるのが、宇佐神宮から勧請された石清水八幡宮。

丹波路の入口に位置しているのが、三輪氏の大田田根子を祀る多太神社。

西国への入口には事代主を祀る西宮神社。

三輪山から流れる大和川には、生駒山と二上山の隘路の入口に龍田大社と廣瀬神社。

河口に住吉大社。

龍田神は住吉神と同神と社伝に伝わる。住吉神社の元社は博多住吉。その社家佐伯氏は三輪氏一族。

住吉大社に伝わる『住吉大社神代記』は、まるで三輪氏の伝記そのもの。

廣瀬神社は外宮の豊受と同神。



『丹後風土記』 「比治里の比治山の頂に井あり。その名を真井（まない）という。天女八人、降り来て水を浴みき。」

衣を隠され、逃げ遅れた天女が豊宇賀能賣（とよのかのめ）、つまり外宮の祭神の豊受である。これを21代雄略天皇の御代に伊勢に勧請したと伝わる。

比治は現在の京都府京丹后市峰山町。その近くに石部神社が2社ある。

その南東の兵庫県朝来市には、三輪氏がこの地に移住したと伝わっている。そこにも2社ある。

琵琶湖の南東岸にも3社存在する地は三上山の山麓。

御上神社（野洲市）祭神の天御影命は、出雲神大国主の子である。

三上山山麓からは、出雲が天孫族から取り上げた銅鐸が大量に発掘されている。

石部神社は北陸と丹波・近江にしか存在しない。その共通項は「外宮」と「出雲」

祭神是三輪氏の祖の天日方。そして、すべての社が式内社である。

瀬戸内海沿岸に集中する高木一族の地名

瀬戸内海沿岸に集中してある高木一族の地名



出雲を除き、ほとんどが瀬戸内海沿岸に集中している。

四国も南部は、高知県香南市高田だけの1ヶ所しかない。

もし、高木・高田の地名が、高い木や高い所にある田に由来するならば、このような偏り方はしないはずである。

東から瀬戸内海を西進して来たニニギ尊（天孫降臨）一行の九州上陸予想地に集中してある。

神武天皇がヤマト帰還（東征）した時も、広島市・府中市・岡山市に立ち寄ったと『記紀』に書かれているが、そこには必ず高木・高田の地名が存在する。

四国北西部の愛媛県に多数存在するが、この辺りは瀬戸内海の潮の境目となる。

愛媛県高部（今治市）もあるが、これは高家を「たかべ」とも読むことから記入した。

（山口県防府市の佐波川下流の右岸に高田の地名が在ったはずだが、見つけることができなかったので省いてある。）

これらがすべて高木一族が展開してつけたものだとは言い切れないが、それでも神話・人口密度などから、その多くはニニギ尊の天孫降臨（九州遠征）と神武天皇の神武東征（ヤマト帰還）に関係するものと考えられる。

そして、神話が史実を基にしていることの傍証とすることができる。

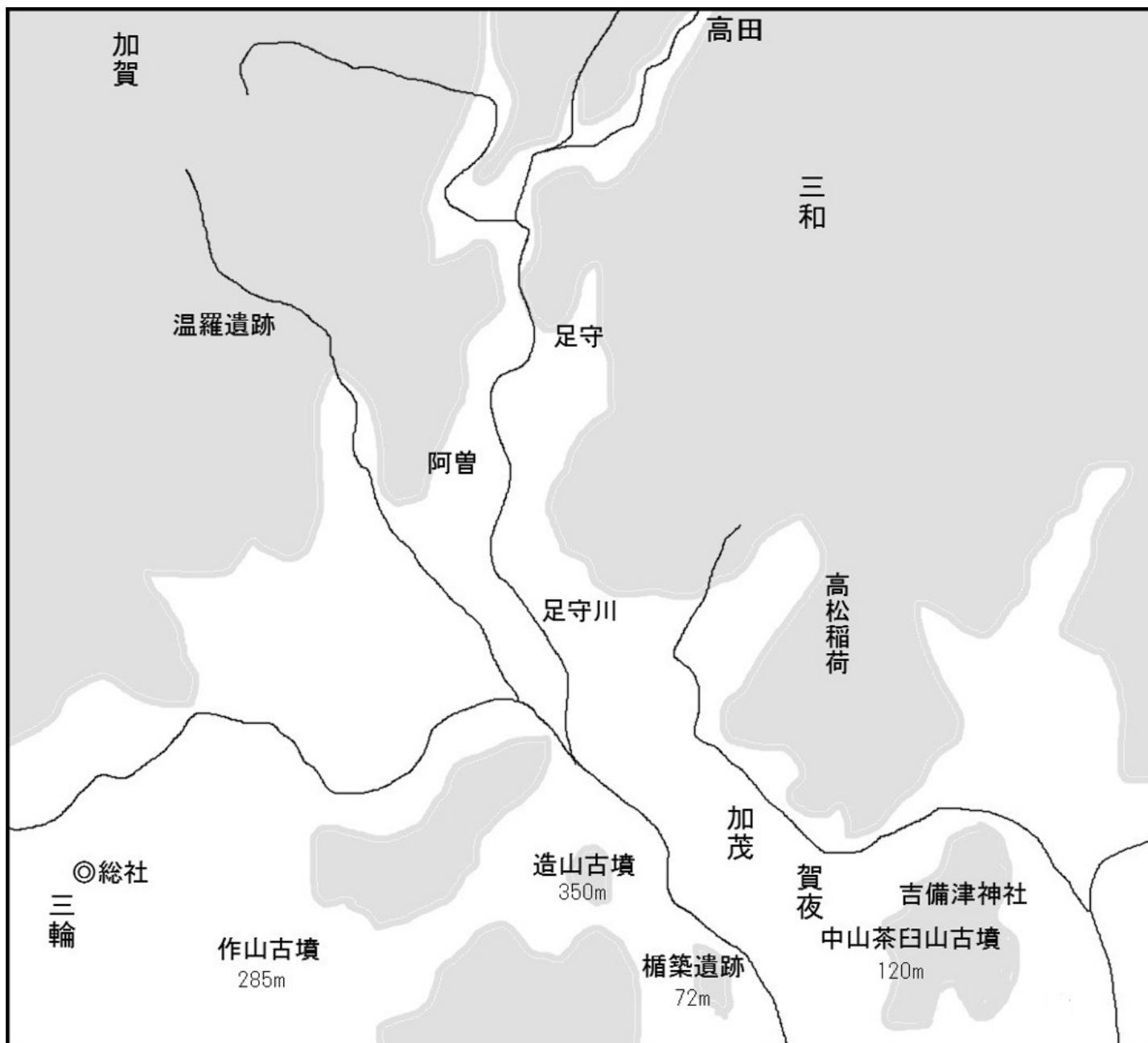


播磨国は西から千種川・揖保川・市川・加古川の4本の大河が流れている。

そのどれにも飛驒の地名と出雲の地名・神社が存在する。

加古川の「加古」は「加賀・蔭」から転訛したものであり、その元は韓神イソタケルの「韓（カラ）」に由来する。

その源流に鎮座する但馬一宮粟鹿神社は、社家の三輪氏が大国主命の子を祀っている。



吉備の足守川流域は古くから開かれていた。

楯築遺跡は後の前方後円墳の原形となった弥生時代最大の墳丘墓である。

その近くにある造山古墳は全国第4位の規模を誇る。

そこに加茂・賀夜の出雲の地名が存在し、上流には飛騨の地名高田がある。

この辺りは吉備の内海と呼ばれ、海岸線が内陸に深く入り込んでいた。

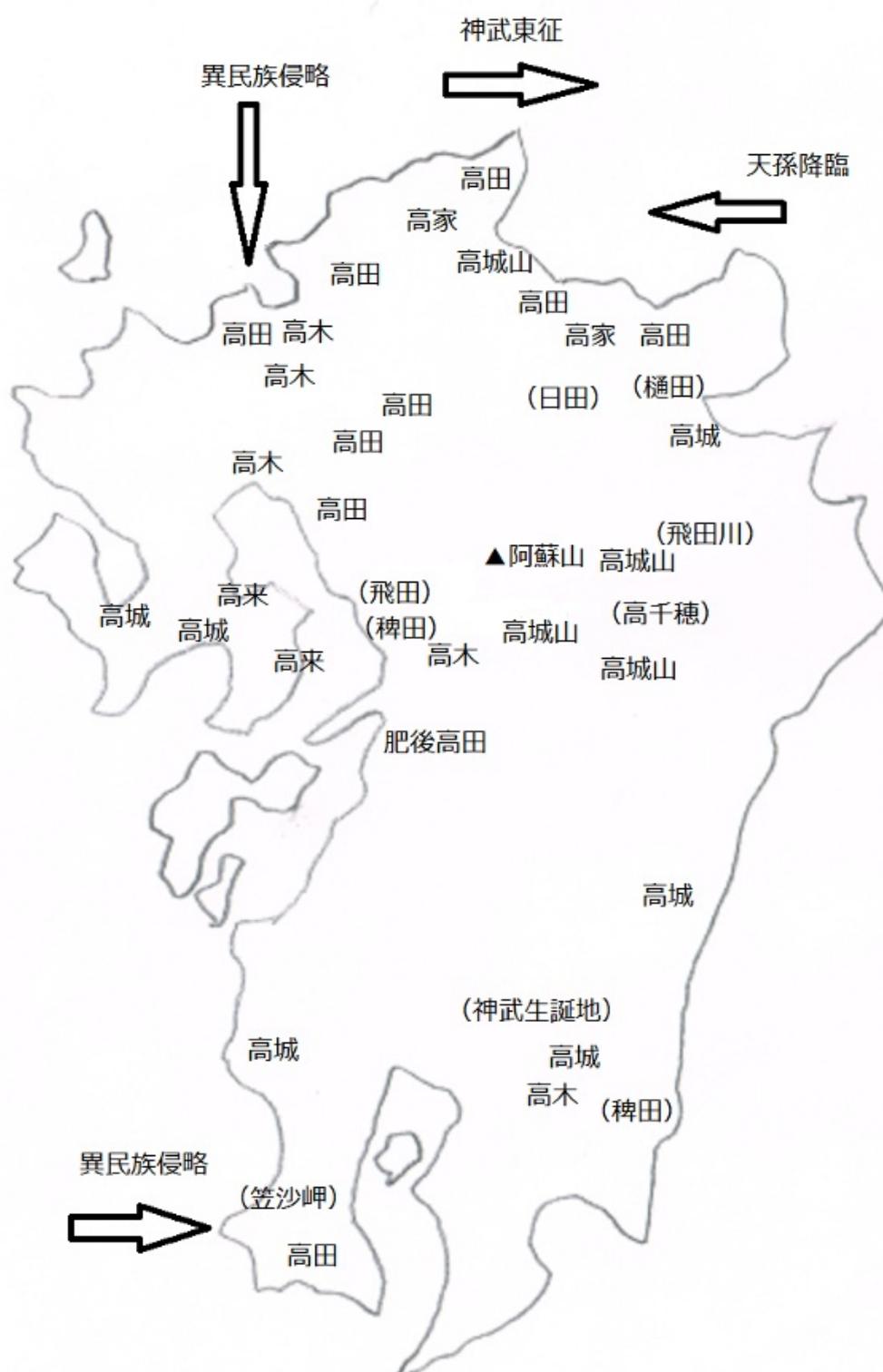
応神天皇が行幸した葦守宮（足守）まで船で行くことができたと思われる。



加賀の潜り戸（島根県松江市）で生まれたとされる鹿島の佐太大神信仰が東進した。丹後に行き「加賀」が「籠」となって一宮籠神社。祭神の子が天香語（かご）山。さらに東進し加賀国、能登国鹿島郡の地名となった。「加賀」が「くく」と転訛した菊理（くく・り）姫は、加賀一の宮白山比咩神社。さらに進んで越後一宮弥彦神社の祭神は天香山（あめの・かご・やま）佐渡に渡って佐渡一宮度津神社で本名イソタケル。

九州の高木一族の地名

九州における高木一族の地名と飛驒の地名



ニニギ尊は高千穂に到着した時、「ここは韓国にむかい、笠沙の岬からまっすぐな所」と言っている。これは半島を経由して侵略してきた異民族と、琉球諸島伝いに侵略してきた異民族を意識

しての言葉であった。

九州は南北から侵略を受けていた。それでニニギ尊一行は福岡東部・大分の海岸に上陸した後、真ん中に位置する高千穂を訪れた。

そして、まず南九州を平定し、拠点宮崎県都城市付近に設けた。

神武天皇は高原町の皇子原（おうじばる）で誕生している。

高千穂と皇子原は、大和朝廷にとって聖地中の聖地であるが、高千穂神社、岩戸神社、皇子原神社、狭野神社のいずれも式内社ではない。

その理由は、神社そのものが後に大和朝廷内の政権を握った出雲によって発明されたものであったからである。

岐阜県飛騨市古川町太江の高田神社が鎮座する地は、富山湾岸に上陸した異民族が、神通川をさかのぼり飛騨に侵入する入口に位置する。それで高木一族はこの地を守った。

神社には高木命が居たと伝わる。太江（たいえ）の地名は高家郷に由来し、その高家は高魂（たかだま）の家、神社名の高田も高魂から転訛したものである。

高木一族はニニギ尊を守りながら、ここから九州遠征（天孫降臨）に出発した（紀元前1世紀）。そして、大分県宇佐市高家付近に上陸した。

九州平定が終わると、神武天皇は福岡県遠賀町の高家郷から船で発ち、ヤマトの高家（桜井市）の隣に橿原宮を造った（紀元前後）。

つまり、九州遠征（天孫降臨）・ヤマト帰還（神武東征）は、高家（岐阜県飛騨市）から高家（大分県宇佐市）・高家（福岡県遠賀町）を経て、高家（奈良県桜井市）に終わった。



高良山麓（久留米市）に鎮座する高樹神社（祭神 高皇産靈命）に、「もと地主神として山上に鎮座していたが、高良の神に一夜の宿を貸したところ、高良の神が神籠石を築いて結界の地としたため山上に戻れず」と伝わっている。

高良山（312m）は、九州一の穀倉地帯を眼下に収める随一の要衝地である。周囲に高木一族の地名が配せられ、その中心となっていたのが高木神を祀る高良山上の高樹神社であった。

ここを高良大社が乗っ取った。
高良大社は築後一の宮（名神大社）でありながら、高良神の正体は不明である。
各説があるが、高良（こうら）は『肥前風土記』に「高羅」と書いて「かわら」と読ませる地名がある。

宇佐神宮の元社とも言われる香春神社（福岡）も香春（かわら）である。
さらに、その元社は筑紫神社（名神大社 筑紫野市）であり、祭神は出雲神イソタケル。
宇佐神宮の神官大神氏も、辛嶋氏も出雲氏族である。

これらのことから、高良山一帯は高木一族が治めていたが、後に出雲氏族に征服されたと考えられる。



皇孫ニギ尊による九州遠征（天孫降臨）の上陸地と、神武天皇の東征の出発地。
さらに後にそこを征服した出雲系神社（宗像大社・香春神社・宇佐神宮）

九州遠征（天孫降臨）は、大勢の人数が数度に分かれて上陸した。
その時期が違えば潮流や風向きも変わるので、上陸地点も幾つか存在した。
その後方には飛驒（稗田・樋田・日田）の地名があり、そして、後にそこに出雲神信仰の神社（
宗像・香春・宇佐）が進出し支配した。



初代天皇神武は、宮崎県西諸県郡高原町蒲牟田の皇子原（おうじばる）で生まれた。ここに立つ狭野神社（神武の幼名サヌに由来）は、大和朝廷が無視した式外社。生誕地を源流に持つ高崎川は、大淀川に合流し宮崎市に流れる。つまり、川を下れば日向灘に出ることができた。本流の大淀川上流には、高城・高木・稗田の飛驒に関連する地名が並んでいる。

この神武生誕の地は東へ行けば太平洋、西に行きえびの市を経て川内川を下れば東シナ海に出ることができる。またえびの市から北上すれば、八代市（肥後高田）から熊本市（有明海）に到る。鹿児島湾にも繋がっている。交通の要衝地である。

西の川内川河口に神武の祖父ニニギ尊の御陵がある。そこに新田神社が立っているが、これも狭野神社と同様に式外社である。大和朝廷は天孫降臨のニニギ尊も、神武東征の神武天皇も重んじていない。

神武生誕地は霧島山（高千穂山）の麓。ここにも天孫降臨の伝説が伝わっているが、これは後に進出した出雲勢力（鹿児島神宮・韓国宇豆峯神社）の創作である。



宇佐神宮（大分県宇佐市）は伊勢神宮を差し置いて国家の宗廟と呼ばれていた。

和氣清麻呂が道鏡事件で神託を受けたことで有名である。

社家の大神氏・辛嶋氏は出雲氏族。

その周辺には高田・榑田・日足・高家などの飛騨に関連する地名と、美和・須賀・石部・御許山などの出雲の地名が混在している。

宇佐市の日足（ひあし）は、神武天皇が上陸した新宮市熊野川町では日足（ひた・り）と読む。御許山（おもと山）とは御諸山（みもろ山）＝三輪山である。山頂に古代信仰の磐座（立石）がある。

10代崇神天皇記に「大田田根子を神主として、御諸山に大三輪大神をいつき祭りたまいき。」と書かれている。

神社の背後に三輪山があるのは大神神社（奈良県桜井市）・白山比咩神社（石川県白山市）と同じ。

杵築も出雲の地名、明治4年まで出雲大社は杵築大社と呼ばれていた。



愛媛県の佐田岬から佐賀関半島を目指せば大分に到る。

この地にも丹生・高城の飛驒の地名と須賀・宗方の出雲の地名が混在している。



皇孫ニギ尊が高千穂に来たのは、北に上陸した異民族と南（笠沙岬）に上陸した異民族の中間地帯であったからであった。ここから南下してまず南九州を平定した。宮崎地方に神話が残っているのはそのためである。



高千穂に降臨したニニギ尊は、「笠沙の岬にまぎ通り（まっすぐ）」と言っている。
ここは日本三大津（博多・津・坊津）の坊津付近である。坊津から遣唐使船が出港した。
ニニギ尊は北と南に上陸した異民族を平定するために、飛騨から高千穂に来たが、まず南から平定を進めた。それで南九州にニニギ陵（薩摩川内）、ウガヤ陵（鹿屋）、神武生誕地（高原）が存在する。

図解 神話の証明

<http://p.booklog.jp/book/60039>

著者：中西正矢

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rokujigenron/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60039>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60039>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ